



秋まき小麦 起生期の追肥をあわてずに！

本年、小麦の現状では茎数が多く過繁茂状態になっています（表1）。越冬状態は良好で、病気の発生も少ないです。また、融雪も早いことから、一部では起生期（調査では3月17日頃）になっているほ場もあります。

過剰な施肥は、穂数過剰による倒伏や止葉期追肥が実施できないことが予想されますので小麦の生育状況を見て追肥を行ってください。

過繁茂（茎数2,000本/m²程度）の小麦は、起生期追肥を控え、幼穂形成期近くより追肥を開始して下さい（葉色が黄色くなってきたり、冬損している場合はただちに追肥して下さい）。

また、葉先が枯れていたり、黄色くなってるほ場がありますが、今後の生育に問題はありませぬ。また葉が紫でアントシアニンが出ていますが、気温が上がれば解決します。積雪が少なく裸地が目立つほ場では根浮きが見られますのでローラーでの鎮圧を実施しましょう。

表1 参考：令和2年春の小麦生育状況（令和2年3月17～18日調査）

地区	畦幅(cm)	茎数/m ²	草丈(cm)	備考
JA今金エリア	12.5～18.0	1,919	15.4	5ほ場平均
JAきたひやまエリア	12.5～18.0	2,048	18.4	5ほ場平均
JA新はこだて若松基幹支店エリア	18.0	1,350	16.4	2ほ場平均

☆ 本年のきたほなみの追肥体系例



起生期の茎数 (m ² あたり本数)		800本以下	800～1,300本	1,300本以上
施肥	起生期	4～6 kg/10a 硫安 約30kg	2～4 kg/10a 硫安 約20kg 地力、前作、は種量に応じて調整する。	0～2 kg/10a 硫安 約10kg
	窒素量			
	幼形期	2～4 kg/10a	2～4 kg/10a	2～4 kg/10a
	止葉期	4 kg/10a	4 kg/10a	4 kg/10a

☆ 起生期追肥のポイント

- ① ほ場の茎数を確認し、茎数に応じた追肥を行うこと
- ② 停滞水のあるほ場は、速やかに排水対策を行うこと
- ③ 根浮きや、茎数が異常に多い場合は、ローラーでの鎮圧も行うこと
- ④ 幼穂形成期追肥時も生育をみて追肥量を加減しましょう。

※ 茎数の数え方がわからない場合は関係機関にご相談下さい。

☆間作アカクローバでダイズシストセンチュウ対策

秋まき小麦にアカクローバを間作することにより、ダイズシストセンチュウが約7割減少します。

は種は起生期の追肥と同時に行います。秋まき小麦収穫後は、必ず麦稈を搬出し、アカクローバの生育量を確保しましょう。

10aあたりは種量	3 kg
10aあたり施肥量	リン酸 4 kg を起生期追肥に加える (熔燐20kg/10a程度)

※クリムソクローバの秋まき小麦間作はできません！！

○●安全第一で農作業を行きましょう！！●○